

「オーイ、見つかったかあー」
取材班の一人が叫んだ。密々とした
ジャングル。目を油断させれば仲間
の姿がかき消されそう。大学教育
の刷新をはかった“ガクサイ”文明
の拠点となった建造物、このあたりの
原住民が呼ぶところの“ソーカ”
を発見すべく、我々、取材班は、こ
こ、リガク部地方のショックブツェン
に足を踏み入れたのであった。

このジャングルをさまよって、か
なりの時間が経過しただろう。しだ
いにスタッフの顔に焦燥と不安の色
がかげりはじめた。無理もない。突
然、スタッフの一人が悲鳴にも似た
罵声をあげた!!

「もう帰ろうや! 写真とったんや
ろ」バカヤロウ! バッチリ、いいア
ングルを見つけたさんといけんのじ
ゃ! — 中央にかすかに見えるのが
総合科学部です。 (桐木淳二)



3. ～発見! 外からの総科～



ポカポカ陽気の日には、静かな屋上でポケーとし
てみたいなんて考える人もいるかもしれません。と
ころが総科本館の屋上に出ようとすると、そこは扉
に鍵がかかって「どんづまり」。静かな安息を求めた
ロマンチストは壁に直面し、安部公房もびっくり落
書きを始めたのでした。とにかく狭き広大の中に、
広大な自由の空を求めた詩人たちの落書きの数々を
紹介しましょう。

「弾圧された?」新興宗教編

「ぼくに共感する諸君、我々青年は少しの汚れも知

～内からの総科～

らない、可愛い赤ん坊のような、あどけない無邪気
な心で、あのまっ青く……(中略) そんな学生た
ちの美しい詩的な気持ちを一切無視し、広大に無辺
な天上の世界への門を閉ざす。開けろ。開けバカ。」
今こそ笑える「飛び出せ青春」編

「こんな高く澄んだ空に向かって大声で叫び、幸福
を確かめようではないか。……(中略)……若者よ。
友よ。ぼくらは各自の情熱の焔に焼かれつくして行
動しようではないか。」

駄洒落もどっこい青年革命家編

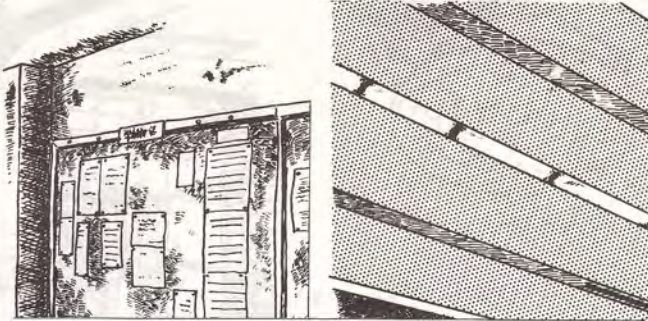
「一体管理側はどういうつもりなのか?……(中略)
お前たちは魂の平安を求める。みずみずしい美的感
情があるのだろうか。……(中略)即刻門を開け!
ゴマ」

まあ屋上に出たいという主張だけは同調しますが、
ぼくなんかどっちかという屋上使って金もうけす
ること考えたりして。総科ビアガーデンなんてけっ
こうもうかったりして。どうです?学長。なに?と
んでもない。どうもすみません。 (橋本記一)



C4

9月 前期試験



4. 特別付録

組み立てパズル式

総科行事カレンダー

つくり方難易度

- | | |
|-----------|------|
| A. 一年生研究室 | ★ |
| B. 大講義室 | ★ |
| C. 自動販売機 | ★★★★ |
| D. ピロティ | ★★ |
| E. 焼肉定食 | ★★ |
| F. 厚生補導窓口 | ★★ |



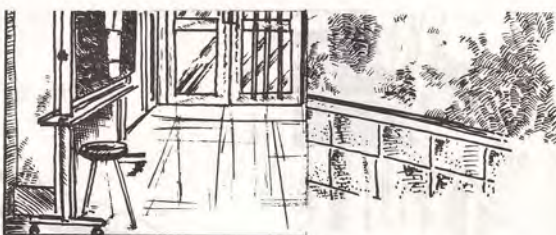
E3

12月 冬休み

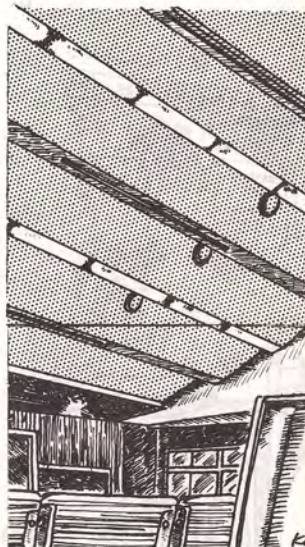


B3

6月 六月祭



F3

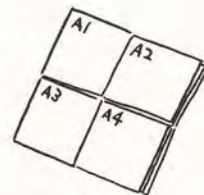
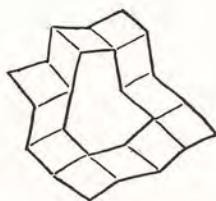
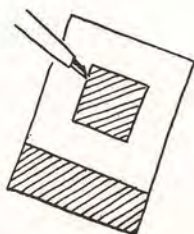
2月 後期試験
卒業生祝賀会11月 大学祭
秋季ソフトボール大会

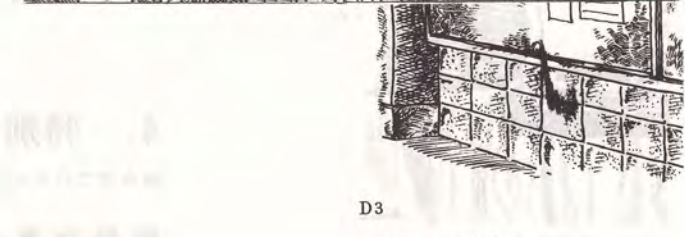
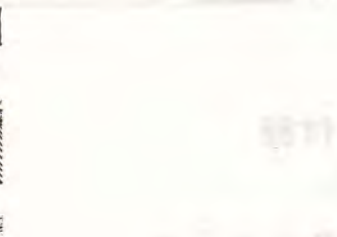
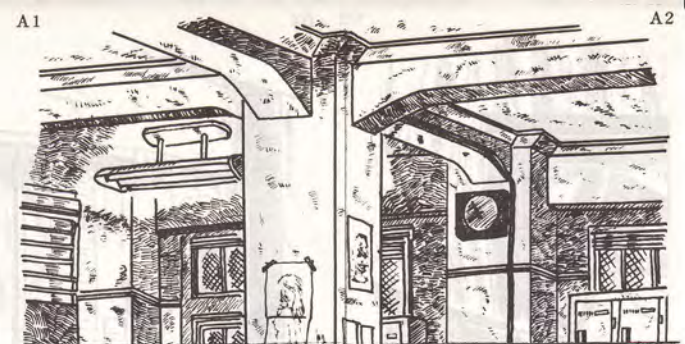
D4

7月 夏休み

新入生には出会いと「なるほど」のシンフォニー、卒業生には郷愁とノスタルジーのランデブーを楽しんでもらうために、総科に関するイメージボードと、一年間の総科の行事を合体させました。あれやこれやと折りまげてパズルを楽しんじゃってください。

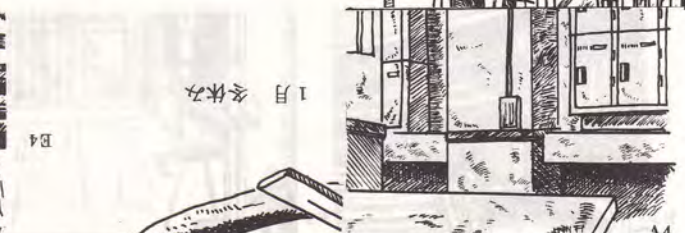
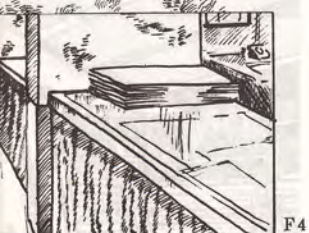
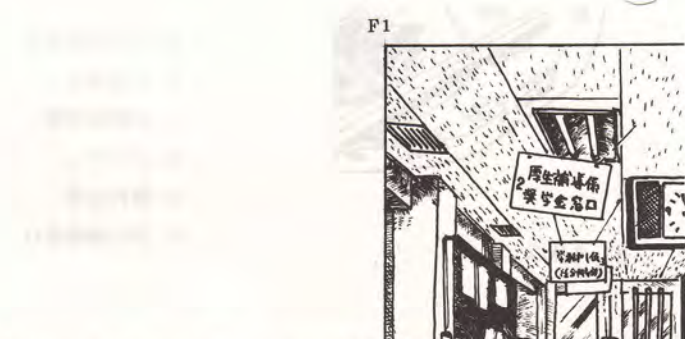
1. 斜線部を切りぬく
2. 折りまげて動きやすくする
3. 番号を四面あわせると完成
たとえば……





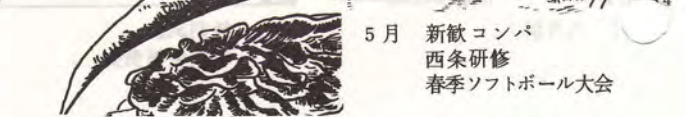
3月 入学式
オリエンテーションキャンプ

D3
10月 試験休み



4月 卒業式

F4 C3
8月 夏休み



F1
5月 新歓コンパ
西条研修
春季ソフトボール大会



5. 無関心を食べるために

～ 総合科学部の掃除のおばちゃん実態ルポ ～

編集部

机の上に置きざりにした紙コップが次の日には消えている。どこのだれのせいかは知っているけど、だれもがみんなわかっていない。それが掃除のおばちゃんである。空気のことを気にしないように、いないと困る人のことに、人は無関心になりがちだ。「空気がいかに重要であるかを知るには、空気になってみればよい」、なんて誰も言っちゃいないけど、人を取り巻く無関心を“食う気”になってしまった。そこで、掃除のおばちゃんの実態取材すべく、寒さが厳しくなりかけた1月末、単身、総合科学部の掃除を手伝わせてもらった。

朝8時、総科玄関ロビー横の詰め所に行く。掃除の“おばちゃん”と書いたが、おっちゃんもいる。おばちゃん4人におっちゃん1人、計5人。なんと、5人で総科の部屋全部を掃除するのである。まず、焼却炉の灰の処理から始まる。石油缶を斜めに切って作ったチリトリで灰捨て場に移す作業だ。みんなでやる。これが終わるとハタキを渡された。「フーン、ハタキでどこをきれいにすんのかな」と思っていると、きれいにする物は自分だった。今かぶった灰をはたくんだそうだ。「おにいちゃん、自分もきれいにせんと」と笑われる。

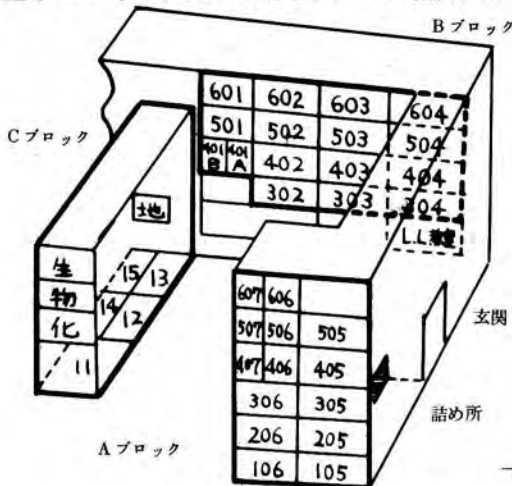
身を清めたところで掃除に出発である。掃除の受け持ちは3ブロックに別れている。1階から6階までの05教室と06教室、計14部屋（便宜上Aブロックと呼ぶ。図を参照）、3階から6階までの01教室から04教室（1階は事務室、2階はL.L.教室）計16部屋（Bブロック）、そして、自然棟の11～15号教室、生物・物理・化学・地学の各講義室で計9部屋（Cブロック）の3つである。すべての階段、廊

下および便所の掃除はしない。これらは学外の業者委託している。Aブロック、Bブロックは2人ずつ、Cブロックは1人の担当で1カ月ごとに交替するという。

第1日目はAブロックにおっちゃんと一緒に歩くことになった。大きなポリバケツ、ホウキ、ダスキン、チリトリを持っていく。まず、1階から6階まで1コマ目に授業のある教室を掃除する。ゴミ箱のゴミを取り、教室内の目立ったゴミを捨てる。黒板消しをはたく。黒板は消さない。これは先生が消すことになっているそうだ。8時40分までにとにかく、一通り目をとおさなければならぬ。それが終わると1コマ目に授業のない教室をていねいに掃除する。授業の妨害にならないように、静かに机を移動しながらダスキンがけをする。「学校の中で知らんことはない。生き字引きよ」という自慢話を裏付けるような、「この道20年」というおっちゃんのあざやかなダスキンさばき。教室の掃除が終わると、今度は各階のエレベーター前に置いてあるポリバケツのゴミ処理。でっかい四角のゴミ箱とポリ袋を持ち、6階から1階、焼却炉へと直行する。ここで一段落休憩。

詰め所に集合し、全員で大講義室の掃除に行く。使用頻度が高いため、週1回、今日月曜日しか掃除できない。隅々までホウキではき掃除をする。ここで昼休みとなるわけだが、おばちゃんたちは取材されることだけでなく、手伝ってもらうこと自体も大変ありがたがってくれる。こちらが照れるくらいだ。労働集約的な仕事で、時間的に追われているため、1人でも人数が増えるとグッと楽になるからだ。

昼からは全員で化学の実験室の掃除に行く。（週に一度の掃除で、月曜日は生物の実験室2つ、火曜日は化学の実験室3つ、水曜日は物理の実験室、これは9つもある。）ホウキではき掃除、その後、ダスキンがけという順序である。私がなにげなく持っていたホウキではき始めると、1人のおばちゃんが替えてくれという。よく見るとほうきに番号が書いてあり、各人自分専用のものがあるようだ。「やっぱり自分のでないかね」と照れ笑いをするが、そこはプロ意識。このホウキ、ブラシを月1回は交換するそうである。



実験室の掃除が終わると、またそれぞれの部署についた。朝と同じくおっちゃんとAブロックに。1階から6階まで各階の廊下のポリバケツのゴミ処理をしたあとは、また教室巡回。今日は大量にビラが机の上に配られている。こいつの仕末がまた大変。授業の間の休憩時間内に仕末しなければならないし、学生がたむろしている中、回収に手間どる。こういう時に協力してくれる学生はあまりいない。あとでおばちゃんに聞いた話だが、ビラをしっかりと踏んづけているのに動こうとしない女子学生もいると言う。「今日、掃除してたら、『ごくろうさん』って言ってくれた学生がおったわ。」おばちゃんが詰め所で話していたのを思い出す。そんなことがめずらしく、うれしいことだとは思ってもよらなかったが、実際うなづける。話がそれだが、こういうビラ、四月には新入生勧誘のもので「四重層、五重層」にもなるという。

斬気淳二の飛翔批評ばなし⑥



「この中が一番きれいだよ」

2日目、今日は水曜日である。前述した物理の実験室9部屋の掃除をみんなでやったあと、Bブロックの掃除に加わった。Aブロックと同様、1コマ目に授業のある教室に目を通し、あき教室をていねいに掃除する。Bブロックの机と椅子は一体成形でホウキではきにくい。「休講になったら学生だけじゃなく、おばさんらも喜ぶんよ。」机を移動する掃除は1教室当たり平均すると週1回であるため、十分きれいにできないのが不満そうだ。

Bブロックの掃除が終わると、これまた週1回のLL教室の3部屋を掃除する。机が移動できないため、丸イスを上へあげ、はいたあと、また下におろす。「授業が終わったら学生にイスを上げさせとき

ゃ楽なのに」とこぼす私に、「学生サマサマじゃけ」と気軽な答えが返ってくる。この時期は楽な時だという。春休みと夏休み前には全教室のワックスがけがあり、秋には枯葉の処理に苦勞するそうだ。

“掃除”のおばちゃんと呼んできたが、実際は用務員さんなのである。掃除だけではなく、書類の配達の仕事もある。庶務課でまとめられた書類を本部に持っていき、かわりに総科苑の郵便物を受けとってくるのである。また、教授の発送する郵便物をポストに投函したり、書留があれば郵便局まで行かねばならない。毎日、10時と3時の一番忙しい時に、1人がこの仕事にかりだされる。3時には大きな台車を持っていくほど大量の配達だ。

2日目の昼からはCブロックを手伝う。1人でやるので大変だ。ここのおばちゃんの「何度やっても賽(さい)の河原ですよ」という言葉は掃除そのものを言い当てて印象的であった。

最後におばちゃんたちが困ることをあげてもらった。まず第一にビラ。これは読んだら1人1枚でも丸めてゴミ箱に入れてくれたらどんなに助かるか。そして、コーヒー・ジュースの飲み残しも困る。痰(たん)を床にはいたり、廊下に備えつけのポリバケツにもはく人がいるそうだ。それと、焼却場の前の駐車禁止の所にバイク・自転車を止めること。通り道をふさがれると大変困るそうである。最後に清涼飲料水のビンやガラスの破片、乾電池などをきちんと不燃性のポリバケツに入れてほしい。特にスプレーの缶は知らずに焼却炉に入れてしまい、爆発する。これは非常に危険である。考えてみれば至極、常識的な事であるが、無関心という奴はそれを見えなくしてしまう。

私たちは自分達のまわりを取り巻く、“空気”に気づいていないはずはないんです。気づいていないふりをしているのではないのでしょうか。無関心を自分で食う気になることは難しいことじゃないのにね。この原稿がそのためのオードブルになることを期待します。

(桐木淳二)

6. 総合科学部の将来を見つめて

— 今堀誠二初代総合科学部長にきく —

総合科学部創設に当初から携ってこられた今堀誠二初代総合科学部長（現広島女子大学長）のお話の2回目。今回は当時あった色々な構想について、そしてこれからの総合科学部のあり方についてお話を伺いました。とくくなれ合いに陥り易い私達には、厳しい御意見もあります。じっくりと耳を傾けて下さい。

旧教養部の壁

ところが、出来た学部は理想とどう一致し、どう一致しなかったかと言いますと、ここが一番大きな問題なんです。みなさんがどう感じておられるかわかりませんが、僕はせっかく総合科学部ができたんだけれども、旧教養部の先生方の中には、昔の教養部の意識でこり固まっている人もいまして、新しい学際的なものやっいていこうということに対し、概して消極的であったと思います。なかには学際研究の推進を、積極的に妨害する行動に出た人さえいました。言うまでもなく各コースは教授会の決定ですが、「地域研究」など全く無視して「歴史学」にたてこもる人もあったのです。私は非常に失望しました。正直言って。

別の例で言えば、予算が来るでしょう。そうすると、旧教養部時代の予算は6千万円から7千万円くらいの程度です。人件費は別として。総合科学部になったら、それが4億何千万円にも増えたわけです。こんなに違うんです。これが教養部とドクター学部の違いなんです。ですが、なぜ増えたのか、増えた分はどう活用せねばならないかが分らない人がいた。私はその増えた分の一部分を学際研究、共同研究のためにプールせよという希望をもち出したわけです。各コースで相談して、きめた共同研究のテーマを、教授会にはかって重要と考えられるものを決定し、それで学際研究のグループを作り、その共同研究で実績を積み上げ、その成果をもとにして文部省の科学研究費を億単位でとろうというわけです。実は僕なんかは、教養部時代にも大学予算では図書は殆んど買っていません。大部分は科学研究費をもらってきて、それでまかっていました。しかし科学研究費がとれる研究というのは、やはり学界で評価された業績でなければダメなんです。それには研究テーマと研究法が、立派でなければ問題にならないので

す。総合科学部になって、折角立派な研究がやれるだけの予算がついたのだから、その20～30%を学祭研究のためにプールして、科学研究費のとれるような、新しい意味のある研究にとりかかり、そして研究成果をあげて、せめて東京工大なみにまとまった（東工大では毎年約5億円）科学研究費がとれるようにしなくては、ドクターを持つ学部とは言えないと、やかましく言ったのです。しかし科学研究費など1度もとったことのない教官も少なくないので、教授会決定は、共同研究費は5%にして、残りは山分けです。山分けなら、それでもいいんです。山分けしたのをまた持ち寄って、総合研究をやるのなら、それでも結構です。しかしこんな研究グループは片手で教える程しか出来ていない。社会文化とか行動科学とか、教授会で決定した学際領域はあるのに、それをやらないで、各個人ごとに在来の科学をやるのは、教授会決定に違反します。多くの人が自分の「たこつぼ」に入ってしまったって、教養部時代とほとんど変わらない個人的な「個人研究」に、精魂をこめてうちこんでいられるわけです。国民は先生方の趣味のために、6億の税金を納めているのではありません。一般教育を一新し、また総合研究をすすめるというから、文部省にしてもこの大金をくれたのです。「たこつぼ」にたてこもるのなら、6千万円でも多いくらいです。

消えた「総合科学」

そういうことで、僕が学部長時代には教授会の時間を、僕1人で使っていると言われたほど、毎回、大演説をぶったんですが、どうしても総合科学部の教授会が了承しませんでした。ですから、僕は辞表を出して辞めたんです。というのは、僕としては総合科学部を作る、総合研究をやるというので文部省等を説いてまわったわけです。総合研究を否定する立場で、物理学だけをやるのなら、その教授は自ら

総合科学部を去って、ポストを例えば環境科学の研究者に渡すべきです。あくまで刑法の分野で純粋に法解釈学をやりたいのなら、法学部へ行けばいいわけです。みんながこんなことをやっているのなら、総合科学部の看板を降ろせと言ったわけです。どうして総合科学部にいるものが、地域研究なり、環境科学なりの研究に、全力投球をしないのかと、不思議に感じていました。総合科学部でメインにやるのは、あくまで新しい学際研究で、それは従来、個別科学でやって来たものとしては、共同研究でやるしか方法がないわけです。教育面でも学生に対して、それぞれ学際研究をやる能力を育てるだけのカリキュラムを組むべきです。例えば情報行動科学の学問体系とその研究法を、講義・実験・演習を通じて、教授すべきだと思っていました。むろん個別科学の教育を十分に施すことは重要で、この基礎が弱くても、総合も砂上の楼閣に終わります。しかしこれは、総合科学固有の教育と研究をやらなくてもよいという理由にはなりません。残念ながら総合科学部では基礎工事が大切だということばかりを主張して、一体どんな建築を作ろうとするのかを、問題にしない傾向が、大勢を制していました。むろん学部としては学際研究を目指して進むべきだという主張に賛成された教授、また自らそうした研究を推進された教授も少なくありませんでした。ただそれが学部全体の意見にはならなかったのです。

マスターコース設置にあたって

私は辞職に先立ち、学部の将来を案じて、マスターだけは文部省と交渉しまして作ってもらいました。これも、教授会の考え方と総合科学に固執する文部省の主張との矛盾のため、たしか14次案か15次案まで作って、やっと合意をとりつけたと思います。特に環境科学研究科は文部省から何度もダメだと引導を渡されたのを、ネバりにネバって、何とか認めてもらったわけです。この時は中村桂樹大学課長補佐の好意をいただきました。

総合科学研究科構想について

しかし、私が本当に作りたかったのは、2つのマスターではありません。1つのドクターでした。ぜひ総合研究科博士課程を作って、私としてはこの研究科を広島大学の中核にすることで、広島大学を学際研究の世界的なメッカにしたかったわけです。総合研究科の設置は、広島大学が発表した高山（一十）委員会報告にも、井内メモにもあって、文部省との間でも設置自体は合意に達していた研究科なの

です。私は総合研究科は総合科学部とは切離して、独立のドクターコースを持った全学的な機関にすべきだと申し立てました。またこれをビッグサイエンスの拠点にするため、総理大臣あたりに働きかけて雄大な計画を実現する夢もっていました。総合研究科には30～40講座分程度の専任教官の定員枠をつけてもらい、研究費も大型プロジェクトのための別枠予算を、毎年何十億円かつけてもらう計画でした。理学研究科などの、既存の研究科の中に、ドクターだけは総合研究科に移ってよいとお考の講座が出て来れば、それらを包括した研究科にする。だから全学的な大学院になるわけです。

総合研究科

(2) 核融合研究

例えば核融合は将来のエネルギー源として重要なので、広島大学にも核融合理論研究センターがあります。これだけでは不完全だから、総合研究科としてはその10講座分ぐらいを核融合の部門にあて、それでも足りない分野については、この研究が完了するまでの臨時的な定員を、別に文部省から借りて来て、センターと一体になって研究を進め、この大事業を広島大学の手で成功させたいと思っていました。だから、もしも賛成していただけるのであれば、理学部の核融合講座はマスターまでにしていただいてドクターの学生は総合研究科に移っていただいたらと考えていました。むろん西川恭治教授にこんな話をしたわけではなく、あくまでも「例えば」の話です。



(2) 平和科学研究

このほかに同じような形で全学的な協力を得たいと思っていたランチをあげると、まず平和科学研究センターがあります。現在では、平和科研は1講座分です。1講座では独立の研究所にならないので

す。せめて3講座以上ないと。そこで総合研究科のうち、3講座分ぐらいを平和研究にあて、別に臨時定員を文部省から3講座程度「加増」してもらい、7部門からなる研究所にもっていきたいというのが私の腹案でした。安全保障の研究機関でもあるので平和科研は世界的に設けられているし、平和学会は国内的にも国際的にも成立しているのですから、ヒロンマ大学に平和科研がないのは不自然です。

(3) 大学教育研究

広島大学の誇りである大学教育センター、あれも現在は2講座でしょう。これでは研究所にならない。今のままでは、いつまでもセンターどまりです。考えてみると、小・中・高の教育を研究する教育学部はたくさんあるのに、大学教育だけは、これを専攻する研究科が1つもないのは不可解です。だから総合研究科のうち3講座分ぐらいを「大学教育研究」に割り、センター自体にも若干の定員を「加増」してもらい、それで大学教育研究所を発足させたいと願っていました。それなれば大学間の国際交流に資するだけでなく、特に発展途上国の大学教育を支援するセンターとしても重要な役割を果たすことができると思いました。日本の大学教育についても、この研究所が全国の大学と連絡をとりあいながら、大学教育の問題点を明らかにすると同時に、解決の道を具体的に提示するならば、新生大学を全国に普及する道が開けるかも分りません。例えば東大だって多くの問題点をもっています。旧制帝大は原則として旧制高等学校の卒業生だけを入れた学校なんです。旧制高等学校というのは男子だけが入っていたわけです。戦前は女子は一人も入っていません。したがって旧制帝国大学というのは、女子教育には全然関心がなかったんです。それはそれでいいですが、新制大学になって東京大学になったときも、女子教育について本格的に検討しようとはしませんでした。なるほど形の上では男女共学になりました。しかし大学の根幹である学部なり学科なりの組織を改めて真に共学の名に値する大学に改組したかという、それが全くないんです。女性の適性が生かせるような学部・学科の創設など、何一つ行なわれていないのです。つまり東大は男子大学だが、女子でも受験したい人がいれば、受験は認めてあげますよと言っているだけなのです。女性の才能とか可能性とかを配慮しない「共学」なんて、あり得るでしょうか。不思議なことに、あの大学紛争の中でも、この点をとりあげて東大を批判する主張は、どこからも出ま

せんでした。これでよいのでしょうか。東大工学部の女子学生は1名位でしょう。同じ工学部でも、アメリカでは二割か三割は普通女子学生です。これで初めて共学大学と言えるわけです。アメリカじゃなくても、日本にも芸術工科大学ってあるでしょう。これなんか卒業生は工学士ですが、かなりの数の女子学生が入っています。工学のソフトウェア部門、工業デザインとか室内装飾だったら、これは女性の方が向いてるわけです。そういうようなことで、工学部にしても女性が進める学科は沢山あるんだけど、東大にはそれを設けようという考えは全くなかったわけでしょう。今のは一つの例なんですが、そういう問題を含めて、日本の大学には無数の欠陥があると思います。そうした問題は、広島大学のすべての学部にも内在するので、どの学部もさけて通れることではありません。やはり総合研究科の仕事になるわけです。偏差値にからんで大学入試が問題になっていますが、これなんかも入試だけをとりあげるのではなく、大学そのものを見直す必要があります。高等学校と一体化して、7年制大学を作ること考えられます。最近、アメリカ等でも日本の評価はかなり高いんですが、日本の大学教育だけは誰も評価していません。新制大学になって30年間も、本格的な改革をサボリ続けて来た結果です。総合研究科としては大学問題の研究には、ぜひ取り組むべきですし、それは日本のすべての方面から、共鳴と支持をうけるに違いないから、きっと成功します。この大学研究には、国連大学を含めた全世界の大学の協力を得ることが大切です。また大学が産業とか社会とかにおいて果すべき任務も俎上にあげ、あらゆる分野を含めた総合研究を、体系的に組織化していくことが、必要だと思われます。

総合科学精神の逸脱

現在、広島大学ではドクターコースを作る努力はなされているわけですが、総合科学部の教官が、既成の大学院各研究科に分散して参加する形が考えられている様です。それは個別科学の研究です。総科が個別科学の研究のため、ドクターを作るぐらいだったら総合科学部なんて要らないんです。それに他学部の各研究科も、総科の割り込みを迷惑に思っています。だからああいう形でドクターが認められるはずがないんです。こうした計画を認めること自体が、総合科学部を作った精神とは全くかけはなれているんです。総科のドクターが、学年進行で出ていなければならないのに、まだ出ていないのは、

総科自身の責任です。総合科学部の中に既に個別研究を志向していく傾向が出ていたでしょう。もし総合科学部が創立時の精神を堅持していたら、学内の他の方面から上記のようなドクター案が出されても、きっぱりとハネつけたはずです。学部内には学際領域を目ざして立派な業績をあげている人も少なくなかったのですがなぜ総合科学研究科を固執できなかったのでしょうか。もし学部が総合研究科で固まったら、制度的には独立していても、総合研究科の中心になり得たはずです。4つのコースは皆代表的な学際研究ですから、黙っていても総合研究科のドクターの柱になったと思います。総科はすでに外部から立派なスタッフを招聘するのに成功してただけでなく、内部の充実強化も進んでいました。例えばアメリカ地域研究をドクターにする為、フルブライト教授の派遣を受け、貴重資料を大量に寄付していただき、教官はフルブライト資金で全員アメリカ留学に行くことができました。学部が充実した暁に置かれるマスターの研究科が、学部創立2年で設けられたのは、旧帝大だけです。そして旧帝大では、ひき続きドクターが設けられています。広島大学の他学部は、工学部でも15年目、法学部は25年目にマスターが発足しているのですから、総合科学部だけが旧帝大なみに扱われていたことは明らかです。旧帝大の新設学部の予算は発足時からドクター予算ですが、総合科学部もそうでした。予定されていたドクターが流産に終わったのは、総合科学部が学部創立の方向から逸脱してしまった結果です。総合研究科の構想については原則として広島大学と文部省の間に了解ができていたのに、それをつぶしたのは広島大学、なかんずく総合科学部の責任だと、私は考えています。

体育学部構想について

大学院の話が長くなりましたが、教養部改革という点では、総合科学部の設置は、言わば第一歩だったのです。第二歩は体育学部の創設です。これは川村毅教授が早くから立案し、文部省の大学局や体育局への根まわしも十分になされ、広島大学の西条移転と同時に発足することになっていたと思います。現在では、移転がスムーズに行かない問題から遅れています、いずれ実現することは間違いありません。

外国語学部構想について

第三步は外国語の充実です。昭和49年当時、文部省は外国語センターを作る計画を進めていて、阪大

や名大ではセンターが発足しました。教養部の外国語の先生方は、センター案に反対でしたので、私は一度もセンターで行こうとは申しておりません、私は個人的には外国語学部を創設し、それによって定員を増加し、特に外国人教授を大幅に迎え、また施設面や外国留学などを拡充できたらと考えていました。しかし、その線で部内および学内の合意をとりつける自信を喪失しましたので、その推進をはかりませんでした。卒直に言って、外国語の教授の一部に、私に対する強い不信感がありました。私が文部省に対し、センター案で行くということで了解を貰っているんだという、全く根も葉もないデマさえ、真しやかに流れていました。私は教授会決定以外、文部省に了承を貰えたことは一切ありませんから、腹が立ちました。同志的な信頼関係がなければ、学部案でもセンター案の焼き直しと、色めがねで見られるから、まとまるわけがありません。もしも教養部の代りに、以上の3学部がそろって成立していたら、広島大学の一般教育は面目を一新できたと思います。だが、教養部長の頭に残ったのは体育学部だけで、外国語学部を作ろうという意欲は消失してしまいました。こうして総合科学部の一般教育改善計画は、中途半端に終わりました。深く責任を感じています。

実現しなかったその他の構想について

見果てぬ夢に終わったプランについて、ついでに話しておきますと、広島大学の他学部の学生定員の半分を、1・2年生分だけ総合科学部にまわして、入試のときは総合科学部生として入学させるという計画もありました。これは高校3年生では、自分の能力がどの方面にむいているか、判断できない人が多い。だから一応、総科に入れて、2年又は3年生になった時、本人の能力と適性に応じ、各学部に配分してはどうかというプランです。むろん中学生のときから、哲学なら哲学を生涯の仕事にすると決めている人だっています。そんな人達のため、定員の半分は各学部に残しておき、最初から文学部哲学科生として入学させます。しかし、実際に大学の授業をうけた後、専攻を決めたいという人も多いわけです。上記の制度を実施する場合、総科に入学させた1、2年生に対して、各学部教官が専門教育を受持ち、学生がどの学科を専攻するかを決める上での資料にさせるわけですから、タテ割りカリキュラムが実施されるということになるわけです。しかし、この案は、評議会内に作られていた一般教育・教養部問題

小委員会で、他学部の賛成が得られず、つぶれてしまいました。この小委員会で検討したもう一つの案は、総合科学部が成立した際、一般教育の単位の取り方を大幅に変更して、例えばフランスに留学したいと思っている学生が、1年から4年まで総科でフランス語の単位を、取れるようにして、フランス政府招聘留学生試験に合格できるようにしたらどうか。工学部なら、物理学なり化学なりを総科で4年間、一般教育として学習して、言わば第二専攻として、十分に修得できる制度にしたらどうか。こういった時間割の面でのタテ割り実施案です。これも各学部には、総科で勉強さす余裕がないということでダメになりました。ところが一昨年、福井謙一教授がノーベル賞をとった時、基礎をしっかりやれと言われたでしょう。この話を具体的に実施しようとした案が、このダメになったタテ割り計画なのです。福井教授は工学部ですけれども、工学部の工業化学だけではだめだ。いわゆる理学的な化学をしっかりやって、これと並行して工学部の工業化学をやらなければ伸びないということを、彼は言っているわけです。総合科学部で化学なら化学を4年間やって、同時に工学部の化学をやれば、その人は非常に伸びるというのが、私の多年にわたって主張しつづけたことなのです。福井発言がリベラル・アーツ・カレッジの授業形態を頭に置いていることは明らかです。このタテ割りのカリキュラムは今からでも全学的に合意すれば出来ることです。総合科学部では教養部と違って、物理学で言えば入門から始まり、4年生の水準のレベルまでの物理学のすべての過程を、積みあげて履習できるわけです。工学部がこの点をタテ割りにして、単位修得を可能にして下さればいいわけです。その場合、結果としてリベラル・アーツ・カレッジの方式になります。

総合科学部の任務とは何か

総合科学部の設立にあたり、広島大学を第八帝大にする為といった、「下司」な考え方は全くなかったと思います。私はそのことを何度も書いています。第八帝大ではなく、新生大学第1号を作り出すために、この学部の創設が文部省によって認められたのだということを、特筆大書しておきます。

総合科学部の任務

(1) 全学的なリベラル・アーツ・カレッジ

リベラル・アーツ・カレッジのもう一つの一般教育方式を、全学的規模において実施するのが新生大学です。むろん、それには体育学部・外国語学部の

創設が必要ですし、3学部が相まって初めて完成するわけですが、やはり総合科学部が主要な担い手になることは事実です。

(2) 総合科学の確立

もう一つの新生大学の任務は、専門分野として総合科学部を創造することです。昔は経済学なんてものは、大学の授業科目にはありませんでした。アダム・スミスが道徳哲学の教授であったことはよく知られていますが、日本でも経済学部が誕生したのは大正時代です。学際研究を推進するために、昭和49年に総合科学部が生まれたわけで、この名をもつ学部はいつの日にか日本の主要な大学にすべて置かれるようになります。その時、広島大学はパイオニアの名誉をにやうことになりましょう。

(3) 日本における「新生大学」の実現

日本は敗戦を境にして、生まれかわったと思いますが、大学は、そして学問は、果たして生まれかわったでしょうか。象牙の塔にとじこもっていた大学は、日本の敗戦を座視した責任、また有為な学生を戦場に追いやった責任はもとより、原爆（日本では仁科芳雄博士により開発に着手されていました）や生物兵器など、人類絶滅につながる兵器を研究していた点で、戦争責任を負わねばなりません。戦後の大学は、人類の福祉と世界の平和、経済の繁栄と民主主義の確立を、実現する義務もっています。これが旧帝大と新生大学との違いです。そして総合科学部・総合研究科の任務も、またその実現のテコとなることだと考えています。

一般教育の充実に向けて

—ひとつお聞きしたいんですが…一般教育の充実ということの一つの目標として掲げていたわけですが、現実にはうまく行っていない様に思えます。それは学生のやる気がないということに原因があるのでしょうか。それとも何か制度的に問題があるのでしょうか。（編集委員）

他学部の一般教育については、後で述べるので、別として、総合科学部のことだけについて言いますと、制度的には今の様な形で、かなり弾力的に運用できるわけでしょう。つまり一般教育と専門教育の単位はどちらで取ってもいいわけです。むろん制約はありますがね。例えば環境科学としますか、環境科学にも柱の置き方にはいろいろありますけれど、例えば工学的なものや物理学的なものを二本柱にするとします。そういう形でやろうとすれば、物理を4年間やって行くようになって来ます。これを一般

と専門にふりわけて、物理学科の学生に近い勉強をすることができます。他方で工学も工学部に負けない程度にやって、かつ環境科学として総合するのが最後の仕上げです。専攻分野の柱の一つは、総科の一般教育の枠組を100%活用すれば、十分に学習できることと思います。より改善していくことは必要ですが、一般教育の空洞化は克服できたはずで、むしろ外国語学部と体育学部が成立していないのでその方面を一つのメインに選んで、4年間を通じて学習することはできません。この点は今後の課題です。特に地域研究は「新しい型の外国語学部だ」というのが私の主張でしたが、それが片肺非行に終わっています。一般教育の体育学を活用して、人間行動や環境科学に、新しい領域をきり開く可能性が大いにあるわけです。

総合科学部における理想的な教育について

しかし現在の総科の単位だけでも、まだまだ活用できます。要は、学部の姿勢が、リベラル・アーツ方式の学習を志向しているか否かです。その方式と言うのは、ごく大ざっぱに申し上げてメインの第1の柱となる学問が $\frac{1}{2}$ 、そしてメインの第2の柱と言える様な学問が $\frac{1}{2}$ 、メインからは外れるけれども自分ではとても大切と考えられる様な勉強が $\frac{1}{2}$ 、それぞれ選択するのがスタンダードです。医学をやるといいますと、医者なんていうのは病気を治すのが仕事でしょう。そうしたら第3の $\frac{1}{2}$ は心理学とか社会学を大いにやることです。社会学や心理学はメインではありません。しかし心理学をきちっとやることは、名医になる基礎でしょう。そういう意味において言いますと直接関係はないけれど非常に重要な学問であるわけでしょう。そういうのを $\frac{1}{2}$ という風に単位をとって行くのがリベラル・アーツ・カレッジの単位のとおり方なんです。総合科学部ではこれに加えて、インテグレートする方法を、またその上に立つ新しい学問体系を創造して行く能力を、身につけさせる必要があります。それを実際に具体化できるのは大学院に入ってからであり、又は社会に出てからですけども、それが実行できるように、基礎訓練は、学部時代に十分やっておく必要があります。生命科学をきわめるには、生物学と物理学、化学を身につけるのが前提となります。それは理学部での授業と全く同じです。しかし両者をインテグレートする為の発想と技術、生命科学として理論化するのに必要な訓練がなければ、生命科学の創造はできません。総合に必要な授業・演習・実験のある点が、

理学部と相違しているわけで、総合科学部を作ったのはこの為です。

次に、他学部のための一般教育にふれております。元来、総合科学部は一般教育の改善と拡充を目的にして、その設立が認められたわけです。リベラル・アーツ的な一般教育と講座制は両立しないという発想に基いて講座制をしかなかったという事情もあります。これは教養部として強く主張し、大学改革の柱として講座制の廃止を求めたわけです。のちに文部省は大講座制という名称を考えて、広大工学部やまた他大学でも大講座制をしくようになりましたが、この発想はわが総合科学部から発したものです。われわれは一般教育の充実には、総合科学部の創設以外に方法がないと主張したわけで、総科こそ一般教育の理想の姿として、全国の国公立大学の注目を集めました。私が学部長だったとき、全国からの来訪者の接待で、自宅で食事することなど殆んどない有様でした。

1972年に当時の教養部教官会は、私の提案した「教養部改良芻案」を正式に議決しました。その全文約5,700字は、「学内通信」4期12号(9月15日付)に発表されています。8項目からなっていて、(1)全学講義の開設 (2)チューター制をゼミナール制に改める (3)学生のための研究会の組織化 (4)教官は定期的にその研究成果と教育業績を報告する義務を負う (5)全学タテ割りカリキュラムによる新しい一般教育の実施 (6)学生の教養部在籍制度の全廃 (7)学生の大学運営参加 (8)学生用研究室の設置 以上です。これは一般教育の改善案の最低限の目標として、正式決定をみたもので、それから10年以上もたっているもので少なくともこの程度のことは実施されていなければウソです。私は総合科学部において、こうした決定がどの程度、実行されたかを知っているわけではありません。またこの8項目を実行すれば、それで一般教育が充実したと言うこともできないでしょう。たゞ一般教育に全学の教官にとりくんでもらい、また学生にもカリキュラム決定などに積極的に参加してもらうと同時に、教養部教官が研究と教育の面で自戒し、発奮することを決意していたことは、間違いのない事実だったのです。

ところが実際に学部が発足した後、総科以外の、他学部生のための一般教育の拡充は見るべき成果をあげ得ませんでした。これには前述の通り他学部の姿勢にも大きい原因がありますが、総科の教官の中にも、一般教育より、専門教育の授業をやりたがる

傾向が出てきました。一般教育の問題点は、総合科学部の創設によって解決できるんだという自負が強かったはずなのに、総科成立の後、その情熱が減退ないし消失し、この謁議さえ半ば忘れられている有様で、改善へのとりくみが十分になされなくなってしまったのは残念です。

社会の偏見に立ち向かうために

— 学生の方としては結構文学部や理学部で研究しているようなことじゃないことをやろうという意志がかなりあると思います。ただそれをやった場合にも、例えば文学部や理学部の先生方は、基礎ができてなくて何が学際だという批判をされたり、あるいは会社の方、求人側の方としては君たちは教養部を出てきたのであって、大学を出てきたのではないという様な見方をされる場合がままあると聞きますが、それについてはどうお考えでしょうか。(編集委員)

それはもう、実力があるかないかによって決まるわけでしょう。物理学は一つで、理学部・総合科学部・教養部その他どこで学んでも、教えることは一つです。むしろ初級・中級・上級といった積上げは必要です。ちゃんとした学問であれば、四年間を通じて、系統的かつ包括的に学習する必要はあります。しかし総合科学部こそ基礎となる学問をマスターするのに最適の学部です。もし学際だから基礎ができていない等というのなら、アメリカのカレッジ出身者は皆ダメだという理屈になります。現に物理学だけをやっている人間よりも、数学とか化学・工学と並行して勉強している学生の方が、比較することで物理学の本質をより深く理解できています。

社会には偏見があって、新しいものを理解しないで、既成の学部の方がランクが上だと思っている人がいます。しかし実力があれば、偏見は解消されます。東大教養学部教養学科なども、スタートの段階では「一高」を出ただけだと見る人もいました。しかし、教養学科の卒業生が、外交官試験でも法学部に負けない成績をあげるし、フルブライト留学生試験にもどんどんパスするので、会社の人事担当者も今は認識をかえています。教養学部の教授が企業をまわって、丁寧に説明して歩いたということもあります。総合科学部の卒業生に対して、教養部出身というような偏見をもっている人がいたら、東大の教養学部よりもっと充実した学部ですよと、言いかえしてやればいいですよ。

コース設置の意味について

— 最近、コースの壁というのが問題になってます。四つのコースが、実際には四つの学科のようになってしまった、という批判です。例えば社会文化に入ると社会科学を中心にやっていくわけですが、やっているうちに、研究の中心が移って、地域文化コースの先生の下で卒論を書きたいとか、あるいは、環境科学の先生の下で卒論を書きたいとか出てくるわけですが、このときにコースの存在が障害になるのです。(編集委員)

総科では、コースの壁というのは本来から言えない筈なんです。総合科学部は総合科学一学科からなっています。それは学科の壁が、これまで大学にとって非常に有害だったという反省から、意識的に学科を1つにしたわけです。また学科の基礎である講座制も意図的に排除して、大講座制により何でも研究できるよう、周到な配慮が払われているわけです。ただ学生が学問を体系的に履習するための、学習のためのコースを設け、コースの指定する単位をとった時卒業できる仕組みになっていますが、これは必要な枠組です。バラバラにツマミ食いをして、それは勉強になりません。それでも卒業できるようにしたいのなら、教養部出身という評価を甘受せねばならないでしょう。学問は独自の体系をもっていますから、体系に沿って順次勉強していかなければ、それこそ基礎学力が身につけていないということになってしまいます。社会文化から地域文化に移ることは、勿論可能です。他学部だったら、他の学科に移るには定員に空席が出来ない以上ダメだし、空席があっても実際には移動は困難です。総合科学部は1学科だから、その壁は原則としてありません。たゞ、社会文化を卒業する以上、環境科学や地域文化の先生の授業はどんなにたくさんとろうと、指導を仰ごうと、それは自由だけれども、卒論は社会文化の卒業生とは言えません。法律を勉強している学生が、環境科学の授業を本格的にうけ、環境の学生と変らない実力を身につけ、環境の先生の指導を十分いただくことは総合科学部創立の精神にかなった勉強の仕方と言えます。しかし環境の先生に卒論を出したければ、コースを変更すべきだし、それは可能です。社会文化を出るのであれば、その指定単位をとり、卒論を書くのでないとダメです。もし環境科学を十分に勉強した学生が、法律(環境法)の卒業論文をまとめることこそ学際研究の姿であって、そんな学生の将来が楽しみです。

前述の通り学生の適性は高校では分らないことが多いので、大学に入学してから、先生方とも相談の上で、自分の進路が選べるところに、総合科学部の1つの特色があります。入学試験は文科系・理科系のどちらで受けようと、コースは自由に選べるように制度化されています。だから、コースの壁があると感ずるようだったら、学部運営が動脈硬化を起こしているのか、あるいは学生の側に非学問的な考えで、論理に合わない授業科目の選択をやろうとしているのか、そのどちらかです。コースと学科は全然違うことを、十分に自覚してほしいと思います。

— 学部創設の精神とは違うんですが、実際には4つの学科になっているのが現実です。反対に文学部とかの方がいろいろな、例えば19条とか使っているんな学部の授業を受けに行ったりして、もっとあちらの方がいいんじゃないかと、言う人までいます。(編集委員)

19条使いませんか？こちらでは。

— 使います。ところが総合科学部の場合は、自分達が学際的であるということにあぐらをかいてしまって、一番19条を使っている率が少ないんじゃないかという危惧もあるんです。(編集委員)

いや、それだったら学生の問題もあるし、それからその学生を指導している教官の責任でもあって、本来の総合科学部の精神から言えばそうあってはならないはずです。またコースが現実学科になっているのなら、直ちに軌道修正をすべきだと、私は考えます。

「広島大学総合科学部」としての特色について

— 70年代くらいから「学際」ということがブームになって、全国に「学際」と名のつく大学・学部が数限りなくできたみたいな状況なんですけど、ここだけは先生がお作りになった時に、他が同じようなことをしても負けないというか、「ここが違うんだ」みたいなところがありましたらおっしゃって頂いて、それでそういうことも含めて今後、広島大学の総合科学部としての発展の仕方みたいなものを、どのようにお考えか、お願いします。(編集委員)

それはまず第一に、一般教育を含めて完全に学際的な授業ができる体制になっている大学は、他にないということです。阪大では早くから基礎工学部が作られていたし、のち人間科学部も創設されました。前後して筑波大学もできました。みな学際研究を目指していて、それぞれ優れた点も多いのです。ただ

そこでは一般教育が基本になり、それを充実し、向上させようというのではなくて、専門教育を学際化することはばかりに重点が置かれています。広島の場合は一般教育と専門教育を一体化しながら、それぞれが十分な教育効果を発揮でき、しかも(この点が大切なのですが)インテグレートする学問論と研究法を教育するしくみになっている点に、特色というか、強味があると言えます。学問として総合科学を創造するには、フィロソフィー、研究法、教育研究体制がそろわねばダメなんです。個別科学に依拠しつつ、学際を旨とするといっても、それは「和魂洋才」的発想であり、本物にはなり得ません。この点アメリカではリベラル・アーツ・カレッジのフィロソフィが、学際研究を支えているわけです。新制大学は一般教育にもとづく教育を特色としているはずなのですが、実際には一般教育は基礎教育におきかえられて、形骸化していました。他の大学の学際研究はこの点に対する反省が十分でなく、一般教育を形骸化したままで、言わば砂上の楼閣を作ろうとしている傾向があるように思います。阪大なり東京教育大学なりの一般教育は、例えばハーバード・カレッジのような、充実した内容を持っていません。それには一般教育を担当する部局の体制が、致命的とも言える欠陥をはらんでいるという面もありました。これでは基礎工学部が生れても、理学と工学を一体化した学際は育たないわけですし、筑波も一般教育空洞化の欠点を、内包したままではないでしょうか。実は広島だって $\frac{1}{2}$ ずつ単位をとり、2つ以上の学問体系を体系的に履習するしくみになってはいません。地域研究とか環境科学は、多くの大学に置かれていたが、その学部自体が一般教育を生かし切っているか否か、広島の場合をふくめて、根幹が問われている訳です。

総合科学部の展望と期待について

総合科学部はカレッジを目指している点に、その本質があるわけで、本質を見失うことなく努力して行けば、必ず世界的な水準での創造力を発揮できる所まで到達することができます。ノーベル賞級の研究の誕生です。本当のリベラル・アーツ・カレッジをお作りになれば、総合科学部は将来において、大きな展望を持つことが出来るということです。ハーバードカレッジとか、コロンビアカレッジという様な格好でやってもらいたいと、可能なんですよ、実際。可能でないとすれば、それは内部で勝手に不可能にしてるんであって、そこにはこれまでの広島大

学の古い体質を墨守しようという姿勢が働いていると思うわけです。それは変えていけばいいんです。内部で変えられるんですから。日本での最初のカレッジだという誇りを持ち、新生大学のトップを切って進んで行くなれば、総合科学部は歴史に残るような人材を輩出することができると思います。

総合科学部発足の本質について

私が総合科学部の創設を決意し、教養部教員会が具体案を決定し、文部省が設置にふみきった理由、すなわちこの学部を設けた意義は、3つあったと思います。第1が一般教育の改革、第2が専門教育の改革、第3が大学院の改革で、この3つの改革が1本化したとき、大学改革は自主的に進行し始めるわけです。

第1は教養部の廃止に始まります。元来、教養部は外国の大学では全く見られない、奇妙な存在です。大学自治の基本は学部自治にあると言いながら、学部ではない教養部を作り、それを学部よりずっと低く位置づけて、これに一般教育の全責任をおしつけたことは、新制大学にとり、致命的な失敗でした。そこで教養部を廃止して総合科学部を作り、その責任部局としたわけです。総合科学部であれば、4年間を通じて一般教育が実施できますし、それが一般教育のあるべき姿です。また学部にして研究条件をよくすれば、立派な教授陣がそろい、授業科目・教官数も大幅に増大します。総合科目の授業・演習・実験は4年間を通ずるカリキュラムで実施し、学際研究の理論と研究法を身につけさせることも可能です。また平和学・宇宙科学・エネルギー科学など

価値観に力点を置く学問体系にふれて科学の社会的責任を考えることも重要です。いくつかの学問体系を、4年間かけて徹底的に勉強するのが、一般教育の原則であって、それは教養部では絶対に学習することが出来ません。総合科学部は一般教育の研究と実施に、責任を負っている学部だということを、重ねて強調しておきます。

専門教育と大学院については、新制大学がドサクサにまぎれて作られたまま、その本質について根本的な再検討が加えられることなく、30年間も既成事実が墨守し続けられたわけです。総合科学部と総合研究科は、学際研究に重点をおきながら、この問題に対して本質的な「問い」を投げかけました。しかし、まだ問題は山積しています。

総合科学部の発足にあたり、当時の教養部教員はこの3点を確認し、大学改革の意欲にもえていました。また総合科学部のフィロソフィに共鳴し、東大・京大・東京教育大、またアメリカの大学等から、個人的には輝かしい将来をなげすめて、総合科学部に移って来られた碩学が多かったことには、文学部も脱帽して敬意を表していました。事務室をあげての熱烈な努力には頭がさがりました。これがなかったら、学部創設は不可能でした。こうした巨大なエネルギーが健在である限り、総合科学部ならびに外国語学部・体育学部と総合研究科の将来は、期して待つべきものと信じます。

(担当：向山教子)



7. マッケンローとは言わないで

— テニス同好会のある一日 —

編集部

やはり、冬も厳しくなったせいか人数が少ない。もうすでに5時を過ぎていているというのに7人しか来ていない。夏は活気に満ちあふれていたのに……。あの頃はコートも男女でにぎわっていたが、それを思うと何か、もの悲しさを感じる。今日は今シーズン最後の練習であることを皆は忘れていたのか。飛翔委員であり、テニス同好会の部員である私は少し怒りをおぼえた。しかし、さっきからいつもより長くやっている乱打のせい、怒りよりも腹が減ってきた。昼食がカレーだったからだろうか。

今年、総合科学部テニス同好会は大胆にも合宿をやったのである。なんと場所はあの有名な日本三景である宮島。新入生はオリキャンでそのテニスコートを見ることになるだろう。包ヶ浦で、キャビンを借り切ったのテニス合宿であった。合宿といってもあまりハードな練習はしない。混合ダブルスの試合が主な目的である。豪華賞品もついている。自慢じゃないが、私は敗者復活戦で優勝した。ちなみに私たちの豪華賞品は5色とうがらしの栽培セットであった。

話を今日の練習に戻そう。6時近くになると、新たに6人の部員がやって来た。なんと女の子が3人もいるではないか。ここで誤解してもらっては困るので言っておくが、女の子は3人だけではない。冬の間、女の子はあまり来ない(冬眠か?)といっているだけなのだ。しかし、部員の女の子は夏でもス

コートをはかないことで有名なので、それが実に残念なところだと言えよう。

さっそくダブルスの試合が始まった。寒さのせいか、みな動きが少し鈍い。審判は特に寒く、試合が長びくと思わず怒りをおぼえてしまう。自分の試合も長かったが、プレーしている時はさすがに審判の事など考えもしなかった。やはり、試合は練習より楽しいものだ。時計は7時を指そうとしている。2時間しかできないのは借りているコートゆえしかたあるまい。今日の練習を思い浮べて考えることは、やっぱりマッケンローは偉大だということだ。ちなみに今春から総科テニス同好会は総科の域を越え、学内的な組織にはばたく予定。新たなスタートをする総科テニス同好会にご期待下さい!! (野田啓三)

軒気淳二の飛翔批評ばなし⑦



「総科お子様ランチは最近、一品増えました」同好会繁盛

総科同好会一覧表

- サッカー ①木・土 a.m 7:30~8:30
同好会 ②南グランド③中尾 洋一(社文56)
素人でもやれるサッカー同好会。
明日のジーコは君だ!!
- 卓球 ①水 p.m 3:00~5:00 ②体育館1階
愛好会 土 p.m 1:00~3:00 ③久保木瑞穂
卓球やりましょう (社文56)
みんなで楽しくピンポンばあー。
- テニス ①月・水・金 p.m 5:00~7:00
同好会 ③広島市立中央コート④木内 秀雄
君もラケットを持ってコートに(環境57)
出ようぜ!!

①練習日時 ②練習場所 ③代表者

- バドミントン ①水 p.m 3:00~ ②体育館2階
同好会 土 p.m ~3:00 ③中島 鋼一
初心者でもいいから来て下さい。(情報57)
- 水泳同好会 ①任意 ②未定
③岡 潔 (社文56)
水着の似合う女の子大募集。
森尾由美みたいならサイコー!!
- マイコン ①水 p.m 3:00~ ②自然科学棟3階
同好会 土~午後 大林研究室
③美濃輪 智朗(58生)
みんなでゲームを楽しもう。
君もゲームを作って一獲千金の夢を!!

8. さて何を学ぼうか。迷える小羊総科生？

編集部

先の「飛翔」25号で、58生に対して行ったアンケート調査のうち、大学進学目的、総合科学部に対する期待、大学院への進学の希望、及び教官の先生方にお伺いした総合科学部生に対する印象等を集計して総合科学部一期生と比較しながら掲載しました。その結果を簡単にまとめると、「就職が有利」を大学進学目的とする者が増えた、「入学後専攻を決定できる」が総合科学部の大きな魅力になっている、大学院進学希望者が大幅に減ってきている、そして教官の総合科学部生に対する印象は概して良いとは言えず、一層の勉学に対する努力が期待されているということになります。

今回は先号でお約束した通り、総合科学部49年度生と58年度生が、学問のどの分野を学びたいと希望して、またどの種の職業につきたいと思って入学してきたか、についてその結果と変化を報告してみたいと思います。

問4 研究したい学問分野

「あなたは、大学（大学院を含む）で、どのような学問分野を研究したいと思えますか」（複数回答可）

のべ有効回答数は、49生 男97 女16 計113 58生 男75 女25 計100となりました。その内訳は図1の通りです。

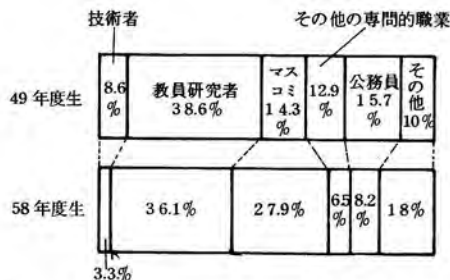


図1

この図から言えることは、49生も58生も、専攻したい学問分野を、人文科学、社会科学、自然科学、その他と大きく分類すると、その比率は大差がないということです。しかしその内容を詳しくみると大き

な変化があり、特に人文科学の中で心理学を研究したい学問にあげている人が目立って増えています。（49生2名に対し58生17名。今回は社会科学に分類した人間行動科学を含めると49生4名、58生21名となる）この傾向は女子学生の増加した50年度にも見られていますが、今回の集計の結果は50年度に比べても2倍の数の学生が心理学を研究したい学問分野の中に挙げているという結果を示しています。何故心理学を研究したいという学生が増加しているかについては考察が及びません。今は心理学ブームなのですか？

研究したい学問分野の中でユニークなものを挙げると「未来学」「情報総合学」など、筆者にも耳新しいものが挙げられていました。

ところで49生の回答の中には、精神医学、法医学等の現実問題として総合科学部で学ぶことは不可能ではないかと思われるものがいくつか挙げられていたのに対し、今回の調査ではそのようなものはほとんどありませんでした。「総合科学部では何を研究しているか」が、世間に知られてきた結果と言えるのではないのでしょうか。

なお今回のアンケートでは20.5%、49生のそれでは32.4%が無答、あるいは「よく考えていない」となっていました。今回のことについて言えば、研究したい学問分野を、3つ4つも挙げる者もあり、結局「まだよく考えていない」と同じなのではないかとも思われました。総合科学部の魅力の1つに「入学後の専攻決定」が選ばれていることを考え合わせると、無答者の多いことに悲観すべきことではないと考えられます。

問5 希望する職業

「あなたは、大学（大学院を含む）卒業後どのような職につきたいと思っていますか。」（複数回答可）

のべ有効回答数は、49生 男65 女5 計70 58生 男41 女20 計61となりました。その内訳は図2の通り。

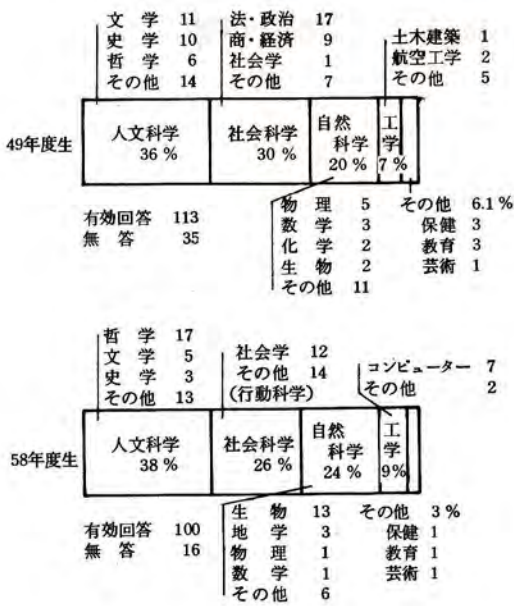


図 2

特徴的な変化を挙げれば、記者、編集者が希望のマスコミ志望者の増加、専門的職業、公務員志望者の減少が挙げられます。マスコミ志望者の増加現象は、現代社会の一般的風潮と言えるのではないかと思います。教員・研究者志望者の率は大きな変化はありませんが、その内容は、49生の多くが研究者志望であるのに対し58生の多くは教員を志望しているという違いが見られます。大学院進学希望者の減少と密接に関係していると言えるでしょう。

ところで具体的な職種を挙げず「未定」「無答」としたものが、49生でも58生でも45%程度(女子のそれは男子よりやや高い)見られています。研究したい学問分野で無答が多かったのと同じ理由で、決して悲観的なものではないと、楽観的に見ておきましょう。問題はこれからどうするかであって、卒業時まで「未定」では困りものでしょう。

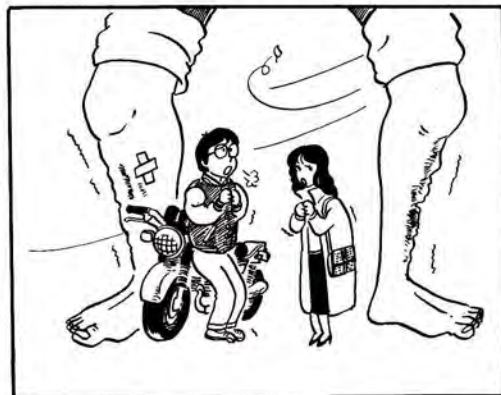
結論

研究したい学問分野については、心理学系の学問を志望する学生が増加している傾向が、顕著に見られました。女子学生の増加によるものと簡単に解釈はできません。希望する職業については、研究者、公務員志望の減少、マスコミ志望の増加が見られました。が、問4、問5両方に未定、無答も多く見られました。

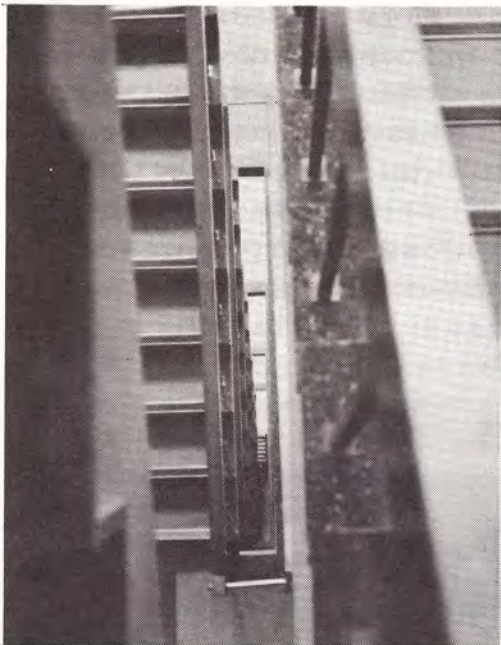
さて、今回のアンケートの主眼は、49生と58生の比較ということだったのですが、そのことについて筆者なりの感想を述べさせていただくと、「変わってきているようで、実はあまり変わっていないのでは」ということとなります。その時の背景によって、大学院志望者やマスコミ志望者が増減したりはしていますが、総合科学部入学当初は、49生も58生も「色々やりたいこと、やりたい仕事があるのだが、さて一体何をやろうか」という気持ちにできるのではないでしょうか。一年生に対するアンケートであっただけに、「未定」や「無答」が多かったのはしかたがないと思います。しかし、是非卒業までには、何でもあるはずの総合科学部という宝ばこから、何かを探して下さい。見つかることを希望しています。

(竹下 斉)

斬気淳二の飛翔批評はなし⑧



「チャップイ、チャップイ スネいくらかじってもお金ぼっちい」



こんなアングルで、みてるのもおもしろかったりして。

私達のまわりには、様々な階段がある。かつては高さの違う床面をただつなぐものであった階段が、時として言葉以上のイメージを伝えるようになった。

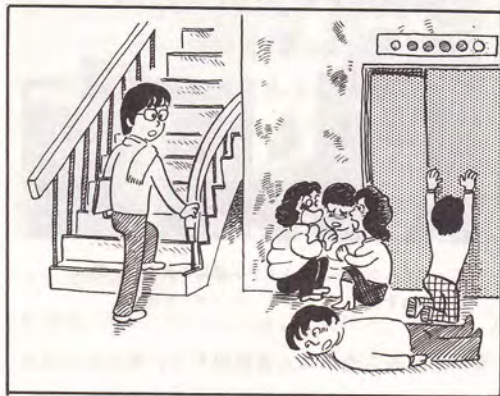
私にとって最も印象に残った階段は、映画『風と共に去りぬ』での3つの階段である。1861年、ウィルクス家のトウェルヴ＝オークス屋敷での園遊会。スカーレット＝オハラが悪名高いレッド＝バドラーと初めて出会ったのは、広くゆるやかな曲線を描いてカーヴした階段を2、3人の少女たちと上っていた時だった。荘厳の美と円熟した品位を持つオークス屋敷に似つかわしい白く上品な階段に立たず、スカーレットは、無遠慮に自分を見つめ視線が合うと人を侮辱したようにおじぎし皮肉なユーモアをただよわせて微笑むレッドを見下ろしていた。その時画面には、のどかで豊かな南部社会を象徴するかのよう、優美な貴婦人のごとき白い階段が映し出されていた。そして、その数年後、南部は戦争に敗れ自らも疲れきってアトランタから戻ってきたスカーレットは、昔の面影もない程に無惨に破壊されたその階段に再会する。その対照が、彼女の幸福な少女時代と現在の彼女とをあます所なく表していた。

スカーレットが、初めて人を殺したのもタラの古びた階段の上だった。タラに盗みに入ってきた北軍脱走兵を、木造のどっしりした階段の上から、ピストルで、撃ち殺したのである。階段の一番上には世の中の善を代表したようなメラニーの青白い姿が、一番下には血を吹きだした汚れた大男が、そしてそのまん中にスカーレットがピストルを手にぶらさげ立っていた。

最後の階段、それはレッドとスカーレットの暮らす巨大な屋敷の緋色のじゅうたんをひいた荘大な階段である。数ヶ月前、暗闇で狂気のようなレッドに抱かれ上っていったスカーレットは、柱に獅子の彫刻のあるこの階段を、レッドとのいさかいの後、一番上の段から一番下まで、ゴロゴロとこころがり落ちたのである。この場面は、映画を観た人は等しく覚えている箇所だろう。画面一杯に映し出された緋色の階段を、階段の柱に掴まろうとして掴みそこねただもう夢中でこころがり落ちていったスカーレット。この時、彼女の人生の一時期が確実に過ぎていったのであろう。

私たちが毎日利用している総合科学部の階段は、893段、プレハブ棟をあわせると全部で1053段、信じて上れば、いつかは、「スカーレットの半生」に出会えるのでしょうか。ちなみに、高層棟が4つもある工学部では、図書館工学部分館まで混ぜて2579段でした。

斬気淳二の飛翔批評ばなし⑨



「がんばって、もうすぐ来るわよ」

10. なんやかんやゆうたかてすめばいなか

編集部



キャンパスのレイアウトは、景観論の立場から校舎の色はカラーシェミレーターで決められた。

工学部が西条に移転してから既に、二年になる。この間移転に関しては、あいもかわらず賛否両論ささやかれているけれど、ここ西条のキャンパスはというと不思議に落ちついている。一年前には掲示板に不満たらたらと書かれた壁新聞も今はなくなり、かわりにクラブ勧誘のピラや、バイター募集のピラばかり目立つようになった。そしてなにより女子学生の多いこと。もちろん、多いといっても本部の比ではないが「千田キャンパス時代よりはずっと増えた」とは某工学部OBの言葉。とにかくキャンパスをとりまく植栽も一応整ってきて、評判のめっちゃ悪かった校舎の色もなんとか目になじむ今日このごろ、屯田兵も開拓地の生活に慣れてきた？ってところでしょうか。



ブックディテクションシステム採用の図書館、黙って本を滞出すると、このゲートでブザーが鳴る。

もっともみんながみんな満足しているわけではない。キャンパスの片隅に申し分けなさそうに立つ、生協のほったて小屋の前には、「早く生協食堂を」という不満の声が何枚もはられている。それになに

より、大学から正式認知を受けていない、このあわれな“継生協”ではあるけれど、この生協の手をかりなくては教科書も売れない、専門書も供給できないのである。確かに、日常生活品は業者の売店でなんとかまかなえるし、食堂だって少々の高値をこらえれば我慢できなくもない。しかし、書籍だけはどうしようもない。工学部生の知的欲求を一手に引きうける生協が認知うけていないのをみると、「この程度の学生に、この程度の書籍供給」なんてバカにされているようなのであります。

(橋本記一)



プレハブの建て物が工学部生協。白い建て物が図書館工学部分館。2年間で、この図書館の完成以外目立った工事の進展はない。



総科移転予定地。造成はすでに完成しているが、新たな工事の気配はない。

	58年	59年	60年	61年	62年	63年
生物生産 教育(福山)		●				
総合科 学校教育			●			
理				●		
文・教・法・経					●	

移転へのタイムテーブル

11. 特別研究論文題目紹介

I 卒業論文

コース	氏名	論文題目名
地域	石藤 智之	「神皇正統記」研究
文化	小林 隆	「西アジア遊牧民における資源と社会—バゼリー資料の再分析」
	高山 博之	ミルトンとイギリス革命
	阿部 馨	イギリスにおける資本主義の確立 —自由貿易帝国主義
	彌富 昭夫	庄野潤三論
	北村 浩司	竹内好論 —国民文学論争を中心に
	久保田 泰史	日中歴史認識の比較研究 —歴史教科書に描かれた「十五年戦争」を中心に
	永岡 宏昌	1960年代以降の韓国農村の変化について
	中原 亨	出口王仁三郎の予言 —「型の思想」を中心として
	西田 真人	山の研究 文学編
	青柳 牧子	「縁起」世界の考察 —空海の思想を中心に
	浅尾 芳明	マレーシア農村の社会構造 —東南アジア社会の一形態
	阿部 綾子	バレエ
	押川 清美	海外と女性 —その女性観について
	鹿山 和子	平家の落人伝説について
	河村 直哉	知覚の意味の自明性 —自己忘却の構造解明のための試論
	木村 和正	ギュンター・グラス研究 —ブリキの太鼓
	楠名 功一	谷川俊太郎研究
	國府田 澄江	ベトナム戦争 —そのアメリカ社会に与えた影響
	滝本 真人	The Crisis of Identity — The Lives of Jewish Americans (アイデンティティの危機—ユダヤ系アメリカ人の生活)
	武川 伸一	1950年代前半の政治的状況 —マッカーシズムを中心に
	田坂 清子	ガンジス川流域の農業地域
	棚田 徹	The Innocents Abroad ; Twain の視点とヨーロッパ (『赤毛布外遊記』; トウェインの視点とヨーロッパ)
	田淵 一則	James Joyce : A Portrait of the Artist as a Young Man 研究 —主としてそのイメージリについて
	中泉 由紀	アメリカの企業の社会的活動 —その歴史の変遷と意義
	中田 和江	16世紀スパイス・トレード研究
	中田 智	言葉の意味について
	中谷 知子	タイにおける仏教信仰とその実践
中村 証二	石原吉郎論 —極限からのまなざしを追って	
中村 寛	30年代中国のユーモア文学について —林語堂を中心として	
中村 嘉孝	南米入移民の文化変容に関する一考察 —19世紀以降のペルーにおけるアジア系移民を中心に	
日本松 知美	アメリカン・フットボールの出現 — ナショナル・ゲームとしての成立	
萩原 富貴子	絵画における線の研究	
原本 美佐枝	イギリスの風土と文化 —風景画家コンスタブルを中心に	
日高 真理子	茹志鵬について —文革前後の作品比較による一考察	
前田 智子	フランス革命期における言語政策 —グレゴワールの活動を中心として	

コース	氏名	論文題目名
地域文化	水口 直樹	三島由紀夫論
	向井 敏弘	ことばと人間関係について - 自称詞・対称詞を中心に
	村上 淳一	ドゥルーズ研究
	安永 省二郎	武一騒動の研究
	山上 弘二	現代中国における権力と民衆
社会文化	菊池 裕一	技術と労働
	住田 美津子	働く主婦と家庭役割 - 性別役割分業から共同分業へ
	千野 信浩	著作者人格権保護の現代的解釈 パロディ・モンタージュ裁判を事例として
	宮崎 三哉	チトー以後のユーゴスラヴィア
	井川 篤宏	国際開発概念の分析
	井手 雅春	戦後におけるイギリス社会保障制度の展開
	内海 恭子	インドの政治家カーマラージの業績と生涯
	大岡 秀有	清酒製造業の階層分化とその展望 - 全国的傾向と広島県の場合
	岡田 敏子	男と女の人類学 - 日本の伝統的村落における男女の諸相
	乙武 隆司	北一輝の社会哲学 - 社会進化論の構想
	香川 修一	広島県農家の農外就業動向
	川村 由美子	都市における住宅と家族 - 基町高層住宅とその居住者像の事例を中心に
	坂口 祐一	第7回非同盟会議の分析
	佐藤 浩司	アジア発展途上国の経済発展と貧困に関する一考察
	篠塚 あさみ	都市廃棄物処理行政に関する一考察
	鈴木 俊夫	日本の経済協力についての一考察
	高橋 浩二	改正区分所有法下の管理をめぐる問題
	高山 修司	韓国における工業化と従属化に関する一考察
	武田 直也	自治体行政と住民参加
	豊永 郁代	インド連邦下院議員の政治的・社会的背景
	永井 敏夫	水利用の高度化と慣行水利権
	広谷 義明	現代日本経済における防衛問題
	松浦 豊	香川用水と溜池水利慣行
	三倉 和彦	諜報活動の考察
	水川 幸雄	地方自治体における行政情報公開制度 - 府中町情報公開制度をめぐる
	森沢 由香	広島家庭裁判所における家事事件
	山中 法光	アメリカ核戦略下における岩国基地の役割と問題
	横馬場 清美	過疎地域の住民生活 - 過疎対策ならびに政策に関する一考察
	吉川 ヒロミ	印パ分離独立とロンドン会議
	情報行動科学	鈴木 善雄
大木 茂生		不安と選択行動に関する実証的研究
前迫 潤子		太陽虫微小管の単離法に関する研究
安東 恵美子		メディアとメッセージの立場が説得に及ぼす効果に関する研究
諫山 絵里香		すべてのD-ループを求めるとの手法
市坂 禎子		定理証明システムの構成
大黒 一哉		骨髄性白血病細胞の分化誘導機構
奥山 千鶴子		脳波による大脳半球機能差の研究 - スペクトル分析法によるイメージ課題遂行時の脳波ラテラリティの研究
雲井 司		説得時間とパトン信号の説得に及ぼす効果に関する研究

コース	氏名	論文題目名
情報行動科学	武知 敬憲	無細胞合成系で翻訳された酵母ペルオキシソーム蛋白質の解析
	中村 幸一郎	Self-control of Pain-self-management versus external management (痛みのセルフコントロール - 自己管理と外的管理)
	中村 隆弘	バイオフィードバックに関する実験的研究 - フィードバックの性質とその有効性の関係について
	成田 実香	日本語構文解析システムの作成
	西 孝子	ウナギ胃の塩酸分泌に及ぼすCa ²⁺ の影響
	野田 広志	対処行動と不安反応に関する実証的研究
	波佐間 正聡	骨髄性白血病細胞の遺伝子発現
	日野 智	痛みの制御とその測定に関する実験的研究
	広瀬 毅	低酸素環境へのラットの馴化過程における生理心理学的研究
	藤岡 美輝	培養トリ胚軟骨細胞の増殖と分化発現を調節する血清中の有効因子の検討
	松尾 奈美	太陽虫の微小管系に対する温度効果
	松木 治子	リレーションデータベース型簡易言語に関する研究
	松村 博志	平面グラフの表示技法に関する研究
	松本 敏行	逆アセンブラのための一手法
	光成 和子	螺旋構造物体のCT型像構成法
	宮城島 浩之	空間内における球体粒子のsize分布の統計的推定
	宮本 武	自動配線プログラムの研究
	村松 賢治	デンシヨバトにおけるSchedul-induced attack 標的鏡映像の変化の及ぼす効果について
	山口 禎裕	社会不安に関する意識調査 認知的対処行動に関する一考察
	山本 泰	パーソナルコンピュータによる図形処理に関する研究
山脇 眞美子	遅延素子を含む論理回路におけるテスト生成アルゴリズムに関する研究	
吉岡 智良	二層配線の一手法	
環境科学	三船 充	リモートセンシングによる地表面構造物の分析
	網本 孝司	瀬戸内海沿岸部におけるアカマツとクロマツの移入交雑に関する研究 - マツ枯れが両種個体群におよぼす影響
	内田 洋一朗	土地条件と透水性に関する研究
	梶谷 耕一	喜界島における完新世サンゴ礁の礁縁構造とその地形学的研究
	進藤 健一	広島市高陽町における快適環境管理手法としての「市民農園」に関する研究
	稲垣 直樹	ラーベス相化合物 (Zr _x 、Y _{1-x}) Fe ₂ の水素吸蔵特性とその物性
	井上 誠司	D _s 電子伝達系成分の精製とその性質
	今村 厚子	都市における植物の生活様式
	大原 高志	黄化カボチャ芽生え各器官別のサイトカイニンの合成と代謝
	折崎 英己	汚水中の硝化細菌
	片山 博文	CsCl型構造をもつDyCd 金属間化合物の磁性
	兼綱 孝紀	逆転層に及ぼす都市の影響
	鎌田 磨人	カワトンボ (Mnais pruinosa Selys) 雄2型の繁殖戦略
	越水 孝	沿岸域海中の重金属 - とくに分析法の検討
	佐光 武文	高周波誘導結合プラズマを用いるカドミウムの発光分析における有機溶媒効果
	笹谷 亨	二元合金の表面における統計力学
	鶴田 幸一	メドハギとネコハギの生活史と除草剤反応性
	西中 勝喜	高密度物質の統計力学

コース	氏名	論文題目名
環境科学	二宮 真理子	ハドロンの質量公式
	藤田 浩伸	体論とその応用
	松尾 克美	大気環境に及ぼす緑地の効果に関する基礎的研究
	松田 方典	能地地区における地すべり調査とその考察
	松本 茂雄	柱状物体のまわりの流れの数値的解析
	山田 睦憲	体論とその応用

II 修士論文

研究科	氏名	論文題目名
地域研究	小林 祥一	文学としての聖書 —その光のイメージリーについて
	加藤 博子	魔術的観念論の研究
	児玉 克哉	原爆被災孤児の生活史に関する社会科的研究
	佐藤 元彦	経済発展過程における都市インフォーマル・セクター
	早田 美穂	黄遵憲の日本観 —その特色と意義
	宮田 良二	マルスィリオ・フィチーノ研究
	柳下 香	イギリス英語の社会言語学的研究
	安居 宏	ウォルター＝ロリーと北米植民事業
	李文 祺	志賀直哉研究
環境科学	秋山 雅也	インドール酢酸およびアブジシン酸の機器分析による定量法とその水ストレス条件下の植物における動態
	安倍 博	デンショバトにおけるサーカディアンリズム —制限摂食時刻条件下におけるオペラント行動と Iocomotor activity の日周変動
	幾島 規理子	大腸菌 DNA 結合蛋白質と RNA との相互作用
	伊藤 康生	リボソーム系における P-450 c ₂₁ とステロイド基質の相互作用
	井上 理	芳井層群の生層位学的研究
	榎本 秀治	パーソナル・コンピュータにおける対話型画面処理手法に関する研究
	岡崎 孝映	酵母ペルオキシソーム系遺伝子のクローニングとその解析
	角田 法也	Mathematical induction in elementary number theory and the hierarchy of recursive functions (自然数論における数学的帰納法と計算可能関数の階層について)
	鎌田 靖	山火事が森林生態系の水循環に及ぼす影響 —系内水循環と流出水の解析
	越村 克夫	筋小胞体における刺激応答性 Ca ²⁺ 遊離と脂質相転移の速度論的研究
	近藤 一郎	液体金属の構造と熱力学的性質 —ソフトコア基準系による摂動理論
	坂本 善一	山火事が森林生態系における塩類循環に及ぼす影響
	清水 宏純	擬ポテンシャル法による液体金属の電子の輸送現象の研究
	新沢 恭子	副腎ミクロソームにおけるステロイド 17 α 位水酸化、C ₁₇ -C ₂₀ リアーゼ反応の解析
	地主 弘幸	Zr (Mn _{1-x} Co _x) ₂ 擬二元系 Laves 相化合物の水素吸蔵物質としての可能性とその物性
	杉本 芳一	ツメガエル肝実質細胞の発生過程におけるヴィテロジェニン合成誘導能獲得について
	寺本 和彦	計算機援用による最適制御に関する研究
	中上 京治	Pl = 12 Ge V/C における陽子-陽子散乱の位相差分析
	百武 弘登	Wishartness and a function of inverse Wishart matrix (ウィッシュャート性と逆ウィッシュャート行列の関数)

研究科	氏名	論文題目名
環境 科学	藤 寛	電解質溶液における $1/f$ ノイズの研究
	藤田 智之	ニガキ (<i>Picrasma ailanthoides</i> PLANCHON) 中の生理活性物質の検索 —クアシンノイドの構造と活性との相関
	古川 康雄	Neural control mechanisms underlying the movements of the radula muscles of a mollusc, <i>Rapana thomasiana</i> (軟体動物歯舌筋運動の神経性制御機構)
	松浦 正明	PARTIALLY BALANCED FRANTIONAL $2^{m_1+m_2}$ FACTORIAL DESIGNS WITH APPLICATIONS (部分釣合い型一部実施 $2^{m_1+m_2}$ 要因計画と応用)
	松浦 昌宏	Mechanism of modulation of synaptic transmission in <i>Mytilus</i> smooth muscle (イガイ平滑筋におけるシナプス伝達修飾機構)
	松村 雄平	ポルフィリン固体膜の関与する光誘起電荷分離機構
	村上 忠幸	モロコシソウ (<i>Lysimachia Sikokiana</i>) に含まれる魚毒・殺虫成分の研究
	森本 日佐人	地すべり・山崩れの地下探査に関する研究とその対策 —中津岡川流域の荒廃調査と対策
	山元 恭介	野外における昆虫相の調査法に関する研究 —マレイズトラップについて

編集後記

『飛翔』の読者の皆様。いつもながら御愛読ありがとうございます。

いきなり、『飛翔』なんてつぶしてしまえ！なんて声の一部の先生方の中に根強くあると聞きます。この行革の時代に、貴重な国家予算を使っていることですから、我々編集委員も心して頑張ってきたつもりです。もっとも、精一杯やればやるほど、『飛翔』をつぶせという声が大きくなるように感じるのは、単なる私の被害妄想でしょうか。

私は、どうも過激な編集長で、「期限に遅れても、御座成りなものは作るな」という方針で来ました。「飛んで、飛んで、飛んで……春が来ます。暖かい春に『飛翔』は出ます。ただ私が『シリーズ数字』で階段の数を教えたのは極寒の暗い12月午後6時でした。地にはったまま『飛翔』を作るのはとっても苦しかったのです」（隠岐幸代）

とにかく、この一年間、気まぐれな私の下、編集委員の面々の努力は皆様にも御理解いただきたいのです。その甲斐あって、№26は、№25に続き、何処に出しても恥ずかしくないと思えるまでのものになりました。もっとも、

「私は自己満足をクリエイトすることが一つの形となっていて、自己讚美の肥大化現象を認識するのです」（桐木淳二）

と言うような状況があることも否めませんが。一方、原稿は期限をはるかに越えてからできあがり、おかげで、事務や広報委員会には多大な迷惑をかけてしまいました。

「天性の無責任さで発行を遅らせた張本人です。叱ってやって下さい!!」（向山敦子）

「ぼくが原稿を最後まで遅らせた張本人です。編集長並びに関係各位の方々、たいへん御迷惑をかけて申し分けありません。

ところで新入生諸君！大学に入ったからには、テーマのドタマでものを考えような」（山田順二）

このように涙ぐましく、責任をとりあう編集委員もいること、我々を許してやって下さい。

さて、今年からは新二年生が中心になって『飛翔』を編集します。何ぶん経験が浅いものですから、いたらぬところがあるかもしれませんが、「つぶせ！」などと言わずに可愛いがって下さい。もちろんぼくも、小舅よろしく、陰日向から参加するつもりですが。

「理系の人間だった僕にとって、この『飛翔』の仕事をするのはいろんな面でプラスになったと思います。ちなみに僕はこの『飛翔』の特集付録のバズルを6つとも余裕でできます。すごいでしょ」（海堀修）

新二年生のこんな言葉を聞くとうれしい限りです。どうです。新入生の皆さん。『飛翔』読むのもおもしろいけど、編集に参加して、自己満足高じて、自己讚美にひたっては。

それから愛読者の皆様。『飛翔』への投稿、御意見、御感想、不満、ののしり、個人的恋文等、大歓迎です。以下の編集委員もしくは厚生補導係まで御連絡下さい。

やりたい放題のついでに言いたい放題、勝手きままに春の日の、陽気にかかれて、編集後記でした。

（橋本記一）

『飛翔』№26 編集委員

56年度生 隠岐 幸代 桐木 淳二 竹下 齊 橋本 記一 山田 順二
58年度生 海堀 修 櫻井 幹士 野田 啓三 向山 敦子

なお、編集にあたっては、広報委員会の「飛翔」担当、堀 信行、米田 巖、斎藤忠資、小村 堯の各教官、および事務官、南沢大雄、内田精二の方々の協力を得ました。